高等専門学校（高専）出身者はものづくりやサービスなど広い分野で働き、日本の産業を支える貴重な戦力となっている。「高専に任せろ　活躍する先輩たち」は企業や社会で学びを生かすＯＢ・ＯＧを紹介する。

高専に任せろ

活躍する先輩たち ㊤

「腕に覚え」現場で生かす

サントリープロダクツ（長岡高専卒）
西山 佳祐さん

東日本大震災のその日（２０１１年３月11日）、長岡工業高等専門学校（新潟県長岡市）の機械工学科４年生だった西山佳祐さん（26）はサントリープロダクツ榛名工場にいた。学校にあった求人票が偶然目に留まり、「飲料のものづくりとは何だろうか」と興味を持ち、工場見学に応募した。

午後２時46分、工場のある群馬県渋川市を震度５強の揺れが襲い、見学どころではなくなった。だがこの震災がきっかけで入社する決意を固めたことになる。被災地に届けられる「飲料水の大切さ。『水と生きる』という企業理念にもひかれた」。自宅に帰れず市役所で一晩を過ごしていると時折、工場の事務長が様子を見に来てくれた。

12年春に入社し、高専で学んだことはすぐ生かされた。工具は見慣れたものばかり。先輩社員が使う専門用語もすんなり耳に入った。

入社４年目、転機が訪れる。ものづくりの改善・革新のテーマを自ら設定し、半年間かけ成果を報告するチャレンジ課題制度で高い評価を得たのだ。缶コーヒー「ボス」の一部商品の抽出過程でまれに発生する品質の微妙なブレの原因を突き止めた。

コーヒーの抽出機の前でガッツポーズをとる西山さん

粉粒体が比重や組成などにより不均一になる偏析という現象で、「大きさの異なるコーヒー豆でも起こるのでは」と仮説を立てた。小型の機械を手作業で製作し実験。段ボールで作った仕切り板でコーヒー豆が炉に吸い込まれる流れをいろいろ変えてみた。

同僚の意見も聞いて試行錯誤の末に現象を再現した。西山さんの仕事ぶりを見守っていた技師長（調合担当）の藤原英志さんは「たのもしく見えた」と目を細める。

同社が高専生の採用を始めたのは10年。３期生の西山さんは今、後輩の面倒を見る立場だ。「腕に覚えのある高専生がもっと入ってきてほしい」と笑顔で語ってくれた。

（編集委員　田中陽）

「困り事」解決の即戦力に

ホンダエンジニアリング（呉高専卒）
杜 勇輝さん

６月、インドにあるホンダの工場にバイクのエンジン加工用の設備が納入された。日本で設計し、タイで組み立てた新しい設備は従来のものに比べ小型で加工時間を半減、投資額は４割減らした。

設計を担当したホンダエンジニアリング設備生産部の杜（ゆずり）勇輝さん（31）は日本から現地に出張し、工場で働くインド人やタイ人の従業員と様子を見守った。

「クルマやバイクが好きだった」。中学校での進路指導で高専への進学を勧められ、呉工業高等専門学校（広島県呉市）に入った。卒業後の２００７年にホンダに入社し、生産設備の設計や生産を担うホンダエンジニアリングに配属された。

世界中のホンダの工場で使う設備を設計し据え付ける。「お客さんのために良い製品を開発する研究所と、低コストで効率よく組み立てる製作所の間で、生産技術で『困り事』を解決するのが仕事」という。材料力学や製図など高専時代に学んだことが現在の仕事に生きているという。

生産設備をインドの工場に納入した杜さん（中央）

担当したのはタイに数カ月単位で出張し、調整に当たった。

ホンダは新卒採用で毎年高専から25人前後を採用しており、会社全体では１２００人弱の高専出身者がいる。人事部の斎藤毅部長は「ものづくりや技術の世界で生きると決めて高専に進学しており、強い意志を持っている」と評価する。「実習などを通じて実技の面でも即戦力となっている。メーカーにとって貴重な存在だ」と、今後も安定的に採用を続ける方針だ。

（若杉朋子）

許諾番号30059731 日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。
掲載日　2017年11月22日　日経産業新聞　012ページ
(C)日本経済新聞社　無断複製転載を禁じます。